



城西寺跡

面積 六九・〇㎡

指定 平成九年五月十三日

所在地 いわき市好間町下好間字大館

所有者 下好間区

江戸時代

城西寺は、鎌倉時代の弘安三年（一二八〇）、時宗の開祖である一遍上人の開基と伝えられる。一遍上人は十六年にわたり全国を遊行したが、東北地方へは白河を経由して祖父の墓のある江刺へ赴き、帰路、当地を通って常陸へむかう途次、上人に帰依して出家した某氏が一寺を建立して上人を開基とし、自らは上人の命により二世となって弥阿弥を名乗ったという。

城西寺は当初、道場小路（現在の道匠小路）にあったが、江戸時代の延宝六年（一六七八）、その地が内藤家の家臣の屋敷となったため、現在地に移転した。その後、戊辰戦争により焼失したが、再建されずに廃寺となった。現在では、二〇基ほど墓石が残っており、うち四基は僧のものである。「當寺十一代相阿寿宣和尚」、「當寺十三代寛阿快岸和尚」等が読み取れるほか、「正徳四甲午歳 一房栄心信女 四月十五日日本宮氏」とあって当時の檀越関係を知る手がかりとなる。江戸時代は一〇石の朱印地があり、時宗の最高位である遊行上人が当地に廻行したときは、ここを本陣として賦算（お札を配ることを行なった）を行った。当時の遊行上人は大名並みの待遇を与えられ、延享元年（一七四四）当地を訪れた一行は、僧侶六三人、人足一三六人、馬七〇頭の大集団で、一〇日間の賦算で三六、三〇〇枚のお札を配ったという。

当史跡には、地元の人々が薄墨桜と呼んでいる桜の古木に寄りそうように墓石がならんでおり、往時を偲はせる。



高月館跡

面積 一三、八二三・八九㎡

指定 平成九年五月十三日

所在地 いわき市平字高月

所有者 個人

高月館跡は飯野平にあり、北に好間川を望む洪積段丘上標高三八〜三四mにあり、周囲を崖に囲まれた高台にある。

この高月館のある段丘面は、県立磐城高等学校の敷地になっている。この敷地の北東に空堀と土塁に囲まれた高月の居館がある。規模は東西一二〇m、南北一一〇mの楕円形に近い形で面積が広い。土塁は東側北寄りを入り口として、この居館を取り囲んでおり、その延長は約二二七mで、東側と南側は高さ五・四mあり、上幅は七mである。西側は高さ四・七mから二・四m程度になり、上幅は一〇mから四mと狭くなる。北側は高さ一・五m、上幅一mとなり、その谷側が急崖になる。

空堀りは土塁の南側に九〇m、西側にも九〇mある。土塁を積み上げるための土砂を掘り取った跡である。空堀の深さ土塁の上端からは約八mで上端は約一五m、下幅五・三m〜二mである。

磐城高校の敷地を含めて高月館の縄張りで、東側の胡摩沢の谷と、南側の風呂ノ沢の自然地形を巧みに利用した中世の城館跡である。

鎌倉幕府の御家人で好島西庄の預所職であった伊賀氏が、鎌倉幕府滅亡後土着して、南北朝の動乱期には武将として活躍した拠点と考えられる。応永年間(十四世紀末)には、伊賀を飯野に改め、代々飯野八幡宮の宮司職として、ここを居館としてきた。



磐城平城跡塗師槽石垣

指定 平成十三年四月二十七日

所在地 いわき市平字旧城跡

所有者 個人

江戸時代・慶長七年（一六〇二）～元和八年（一六三二）

西側面 長さ 一三・四m、高さ 一・二m

北側面 長さ 一三・一m、高さ 三・七m

磐城平城は、徳川家康の家臣島居忠政が、慶長七年（一六〇二）に一〇万石を拝領して磐城に入封し、築城したものである。

阿武隈丘陵から東へのびた台地東端部の急崖に恵まれた自然地形を巧みに利用して占地する。石垣は本丸の主要部周辺に限り施されている。城の古絵図（平城下絵図・市指定）には、西から

本丸に通ずる六間門・大手門・石火矢台・中門、北からの櫓形門・塗師槽・隅図槽などに石垣が描かれ、当時の本丸をとりかこむ施設に石垣が設けられていたことがわかる。

塗師槽跡の石垣は、北から本丸に入る櫓形門・石垣に取り付く北東角に築かれた石垣で、築造当時の状態を見ることができ

すべて自然石で野面の大きさをそろえ、横目地を通すことを意識しながら、隙間に間詰を多く入れた布積崩しの新穴太積様式で積み上げられている。加えて、角隅に切石の算木積みが発達

などところから元和期の構築であることが知られる。

磐城平城は明治五年（一八七二）に、磐前県より民間に払い下げられた。塗師槽跡の石垣は往時を物語る遺構として、また磐城平城の構築年代と、石垣積み

の技能者集団である穴太衆の存在を知る上で極めて貴重である。



上遠野城跡

七、二五〇㎡

指定 平成十五年四月二十五日

所在地 いわき市遠野町上遠野字堀切

いわき市遠野町深山田字大山沢

所有者 個人

上遠野城跡は、八潮見城とも称呼されており、阿武隈山麓東縁の三体明神山から南走し、沖積地に突き出す枝丘陵の先端部に位置している。標高は約一五〇～二三〇m、主郭部付近は約二二〇mを測る。本丘陵裾部を蛇行しながら東・南側を走る上遠野川と西側を走る根本川が丘陵南西端で合流しており、上遠野城の外堀の機能を有していたものと考えられる。

上遠野城跡は、長軸二七m、短軸二〇mで東・北側を土塁が囲む主郭(居館)と考えられる曲輪をはじめとする約二百の曲輪、尾根に直交し掘り込まれた数十箇所の堀切、各曲輪の連携を遮断するために等高線に直交するように斜面部などを掘り込んだ堅堀、主郭部周辺で確認できた土塁、幼児頭から人頭大の礫を野面積みにした石垣、主郭部西側曲輪で三箇所程確認できた井戸跡と考えられる水ノ手、物見台や狼煙台などとしての役割を担っていたものと考えられる櫓、このほか、道跡や門跡、橋跡などが確認されている。

国人領主から岩城氏の有力家臣となった上遠野氏の居城で、慶長七年(一六〇二)、徳川幕府の領地没収による岩城氏の没落に伴い、まもなく廃城となった城跡である。上遠野氏は、鎌倉時代以降菊多荘の総地頭職であった下野の小山氏の流れを組む、永和五年(一三七九)、上遠野郷を上遠野兵庫介に賜ったという文書が、上遠野氏の初見である。

市内の中世城館跡の中で、保存状態が良好で防御施設とその普請状況や工夫が極めてよく観察できる城館跡である。



腰巻横穴墓群A十八号横穴墓

一基

指定 平成十七年九月三十日

所在地 いわき市平神谷作字腰巻

所有者 個人

六世紀後半

腰巻横穴墓群は、滑津川河口から南西方約1kmの丘陵先端部に位置し、沼ノ作溜池を取り囲む凝灰質砂岩の急崖面に構築された六世紀後半から七世紀代の横穴墓群である。

同一丘陵の東側には八幡横穴(市指定)、そして、南東側の浜堤上には神谷作一〇一号墳(出土した男子胡坐像をはじめとする埴輪群は国指定)、白穴横穴墓群(古式双龍環頭太刀出土)などが隣接しており、いわき市を代表する古墳が群集する地域である。

平成十六年五月、彩色のある横穴が偶然発見されたことから、横穴群の全体を把握することと彩色のある横穴の測量を目的とした確認調査が実施された。

調査の結果、四群から百七基の横穴が確認され、市内で現存する最大級の横穴墓群であることがわかった。彩色のあるA十八号横穴墓は、A群西側の東方下端に構築されている。玄門部入口から玄室奥まで一九三cm、玄室は長さ一七〇cm、幅二五三cm、高さ一〇〇cmで横長方形の平・断面プラン、天井はほぼアーチ形を呈している。ベンガラによる赤色の彩色は、奥壁と両側壁のほぼ中央部までの床面五〇〜一〇cm上部に幅二五〜三五cmで帯状に、また、奥壁上部部にも径約五cmの珠文が認められる。いずれも無地の平塗りである。壁面は崩落が激しく、全面に彩色されていたかは不明である。

市内では、国史跡・中田横穴の三角文、餓鬼堂横穴墓群の全面平塗り、さらに百個以上の珠文など、三基の彩色のある横穴が確認されているが、腰巻横穴墓群の帯状文及び横長方形の玄室形態は、三基の横穴とは異なる様相を呈している。



久保磨崖仏

八七一㎡

指定 平成二十一年四月二十七日

所在地 いわき市鹿島町久保字相京作

所有者 金光寺

鎌倉時代か

鹿島街道に突き出す丘陵の南東側斜面に位置し、凝灰質砂岩の崖面を龕形に彫り窪めた中に、如来形坐像を半肉彫りに彫り出しており、現状で四体確認されている

(一) 像高一四cm。衲衣は両肩を覆っているようで、両手屈臂して坐す。

(二) 像高一三四・五cm。両手屈臂して膝上におき、弥陀の定印のような印を結んで結跏趺坐する。如来形坐像の右耳の耳輪が僅かに残る。岩壁より削り取られ、別の場所に移されている。

(三) 像高一二〇cm。磨滅などが激しく形状不明。岩壁より削り取られ、別の場所に移されている。

(四) 像高八一・五cm。衲衣をつけて坐す。龕入口上方左右には円形の穴がそれぞれにひとつある。もと覆屋が設けられていたものと考えられる。

以上のように、磨滅により半肉彫のように見えるが、当初は厚く彫り出されていたものと考えられ、大きさも充分にあり、肩張りもあり堂々とした体軀が視える。首も太く、(二)に残る右耳の耳輪も太く力強さも見られる。

いわき市内における磨崖仏の類例は少なく、破損が激しいとはいえず、大きさ、技法、さらに堂々とした体軀も小名浜の住吉磨崖仏に通じるところがあり、造立年代の上限は鎌倉時代に遡るかもしれない。市内では時代的にも古く、何とか当初の規模も保たれている磨崖仏であり、貴重である。



岩城家墓所

約一五・八m

指定 平成二十六年五月一日

所在地 いわき市平下荒川字諏訪下

所有者 龍門寺

室町時代

龍門寺は応永十六年（一四〇九）に開創されたいわき地方最古の曹洞宗寺院であるが、その開基となった岩城朝義以後、子孫の墓所である。記録では岩城朝義は応永十四年（一四〇七）に死去しているから、子の岩城常朝が父を開基として現在地に龍門寺を建立したものと思われる。墓所は歴代住職の墓域の一角にあり、後世この地に、切り石を基礎に置き、まとめられたものらしく、当初の完全な姿を残す墓石はない。

墓所には宝篋印塔が七基、五輪塔が一基、無縫塔または卵塔一基、光背をもった仏像とも思える墓標一基、全体像が全く不明の二個の礫片からなる一基の計十一基が横一列に並んでいる。墓石の材質は、一部に砂岩、花崗岩がみられるが大部分は石灰色の凝灰岩と思われ、いずれも風化が進んでいる。最も大きな宝篋印塔（全高一・三m）の塔身には、正面・裏面に人型のような浮彫り、右側面に「卍」の浮き彫り、左側面に「應永十四丁亥年 重祐禪勝大居士十一月八日」が彫られている。（龍門寺には「当寺開基龍門寺殿重祐禪勝大居士」の位牌が残されている）また宝篋印塔二基には四面とも格子状の浮き彫りがあり、うち一基には「鷹山俊」「公大□□」「三十二□□」などの線刻があり、天文十一年（一五四二）に死去した岩城由隆の法名が「鷹山俊公大庵主」であるから同人の墓であろう。それ以外の墓石は誰のものか比定できず、また様式も異なるものが混じっており、墓石の組み合わせも当初のままとは思われないものもあるが、宝篋印塔の形式を持つ室町時代の墓所として、岩城家の足跡をたどる上で極めて貴重な墓所である。



白水阿弥陀堂の大イチヨウ

指定 昭和四十三年十二月二十七日

所在地 いわき市内郷白水町広畑

所有者 願成寺

国宝白水阿弥陀堂の境内に、大きなイチヨウがある。昭和四十七年以来、境域復元工事が進められ、建造物保護のために脇枝と梢が切り落とされた。樹高約二九m、胸高幹周り五・九mの太木で、高さ一〇m付近に相生の桜とサカキがあつたが桜は枯れてしまった。

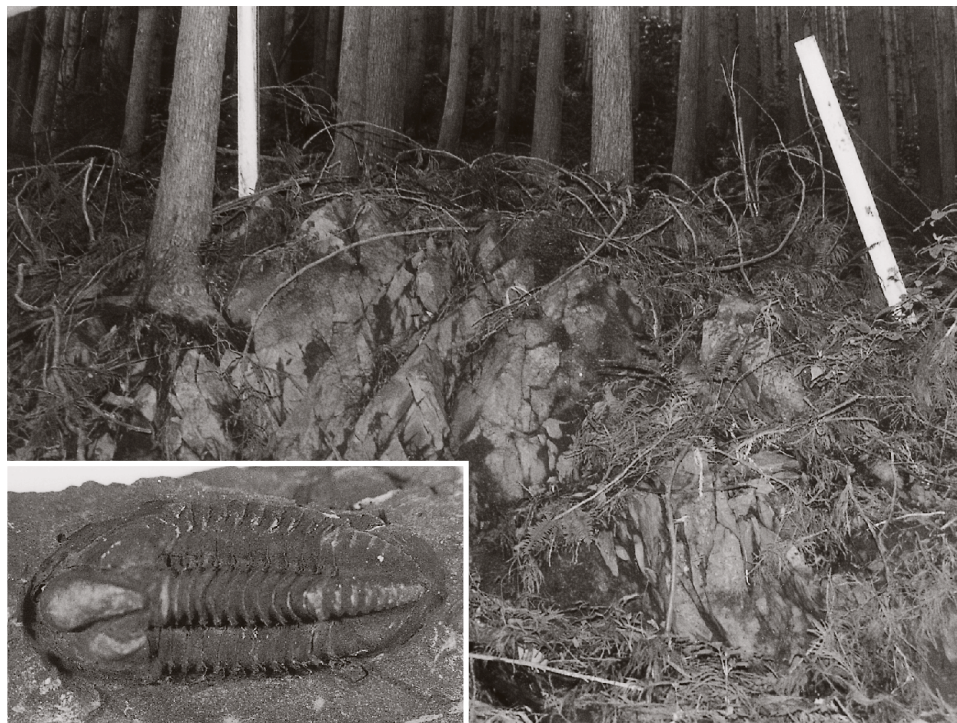
古木になると枝から乳房状に下垂する気根が出るが、本樹にも下垂した気根があつたらしく、切断した跡が残っているが多くはない。

イチヨウは生長が早く、土地を選ばないので太木になり各地で天然記念物として指定されている。本樹も市内では太木に属する。

イチヨウ（イチヨウ科）

落葉の高木で、成木では樹高四五m、直径五mになる。樹皮は灰色で厚く縦にさける。枝は長枝と短枝があつて、長枝は互生するが、短枝は数枝が叢生する。雌雄異株で雌株の花には二個の裸の胚珠があり、雄花は黄色の穂状になる。花粉は遠くまで飛ぶ。秋になると子実の外皮は悪臭のある肉質となり、内皮は堅い紡垂形で内部に子葉をふくむ、いわゆるギンナンとなる。イチヨウは中生代に栄えた樹木で、日本の中生層からも化石として出土するが、絶滅して日本に自生地はない。従つて、日本のイチヨウはすべて渡来のものである。

原産は中国奥地らしく、浙江省には他の樹木にまじつて野生種があるといわれている。



高倉山古生層

指定 昭和四十七年十月十二日

所在地 いわき市四倉町玉山字元村

所有者 個人

古生代二疊紀

高倉山付近に分布する古生層は一九五〇年に、この付近の地質巡検中の市民が、古生代に生息していた腕足類化石を採取したことによってはじめて確認された。

高倉山付近の古生層は高倉山層群と呼ばれ、下部より松山沢層、入石蔵層、元村層、柏平層の四層に分類される。全層厚はおよそ二、〇〇〇mに達し、おもな岩層は黒色粘板岩・砂岩・礫岩等であり、三葉虫・サンゴ・二枚貝・腕足類・アンモナイト・蘇虫類・有孔虫・植物等の化石を産出する。

これらの生物群や岩質から、当時は外洋に面したかなり広い静かな内湾であったことが推定される。とくに柏平層より出る三葉虫化石は、福島県の他には、岩手県など数県しかなく、その保存状況の良好な点は、わが国においては第一級のものである。またアンモナイト類のワーゲノセラスなどは、古生代・ペルム紀中期の代表的化石で、国際的基準になっており、時代決定に最も重要なものである。

従って、これらの古生物群は、我が国古生代後期の地史解明には重要なもので、その学術的価値は極めて高いものといえる。高倉山古生層を最初に確認したのは、昭和二十五年十月平地学同好会の野外巡検の際に、高倉山の東麓のB沢で二枚貝の化石を発見したことにはじまる。その後の昭和三十三年には、三葉虫が発見されて、これらが学会に報告され認められたのである。さらに高倉山古生層と、それに接続する北方の八基鉾山周辺の古生層とその地史的・構造的な関係が解明された。



佐麻久峯神社叢暖地植生

指定 昭和五十一年五月二十七日

所在地 いわき市平中山字宮下

所有者 佐麻久峯神社

佐麻久峯神社の森は、典型的な社寺林の姿を残し、近隣に適度な緑地を提供している。

暖帯性植物群落にある境内の周囲は、おもに常緑広葉樹林でおおわれ、中にまじって落葉樹や植栽のスギの大本がある。おもな樹種はスタジイ・アカガシ・ウラジログシ・ツクバネガシ・カヤ・ヤブツバキ・ヒイラギ・モチノキ・ヒサカキ等の常緑広葉樹や、ケヤキ・ヤマザクラ・アカメガシワ等の暖地系落葉樹、ムラサキシキブ・ガマズミ・ホオノキ・ヌルデ・エゴノキ・カスミザクラ・スズタケ等の阿武隈山地との共通種がまじっている。これらの植物からみると、暖帯から温帯へ移行しはじめた地域の植物相を示している自然林であるといえる。植物社会学的には、ヤブツバキクラスのヤブツバキ・スタジイ群集に属し、アカガシ下位群落とウラジログシ下位群落を含むスタジイ・アカガシ群落である。

スギの大本は樹高二二・六m、胸高幹周り五・八二mで遠くから見える古木で古い枝が四方に伸びているが、近年太枝の一部と梢の枯死が目立ち樹勢衰退の傾向にある。

近年は平地・丘陵地の常緑広葉樹林が次第に姿を消し、社寺林・崖地林・屋敷林として残るのみとなった。佐間久峯神社の森は、過去の平地の自然植生の名残りであり、潜在自然植生を推定する手がかりになる。



御齋所山熊野神社叢
ごさいしょやまのくまのじんじゃのしゅうそう

指定 昭和五十一年十一月三日

所在地 いわき市田人町黒田字齋道

所有者 熊野神社

鮫川に沿った御齋所峠から南に見える急傾斜の自然林が、御齋所山熊野神社の社叢である。一見落葉樹林のように見えるが、常緑広葉・針葉樹をまじえた阿武隈山地の象徴的な森林である。

御齋所山は硬い変成岩の山で、風化が進まず土壌が発達しにくい。岩塊が露出した急峻地には松林が成立し、下層に根が浅く細いツツジ類と、地表にイワウチワが生えている。マツはアカマツとキタゴヨウで、ツツジ類はトウゴクミツバツツジ・アブラツツジ・シロヤシオ・ヤマツツジなどである。

凹地部は土壌が発達し、モミ・イスブナ・カヤ・アカシデ・ケヤキ等の高木が生えており、その間にリョウブ・アセビ・イロハカエデ・ミツデカエデ・ヤブツバキ・ウラジロガシ・アカガシ・ミヤマシキミ等が生育し、モミラン・カヤラン・ヨウラ克蘭・クモランなどの着生ラン類も知られている。

このうちキタゴヨウ・シロヤシオ・ミツデカエデは、温帯性のヤブツバキ・ウラジロガシ・アカガシ・モミラン・カヤラン・ヨウラ克蘭・クモランは暖帯性の植物で、モミ・イスブナ・アカシデは両気候帯の中間に生育する。

中間温帯植生は年間気温較差が大きい東日本ほど顕著で、阿武隈山地では山麓から中腹にかかる地域にあたり、いわき市のほぼ中央を北東から南西に走っている。



長宗寺のタラヨウ

指定 昭和五十二年五月四日

所在地 いわき市常磐長孫町八幡平

所有者 長宗寺

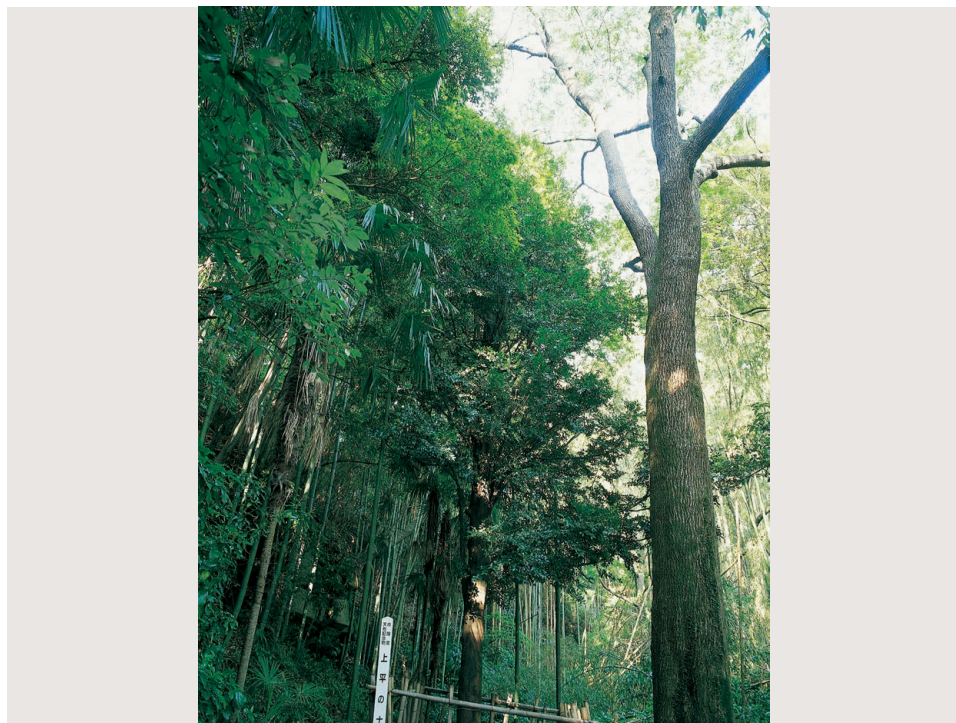
本樹は、周囲を丘陵に囲まれた長宗寺の境内にある常緑広葉樹で、樹高一九・三四m、胸高幹周り二・三m、樹冠は北一〇m、南二・五m、東六・三m、西八・三mにひろがっている。本堂にかかる枝が切り落とされたため、本来の姿を示していないが、萌芽が極めて盛んで、脇枝が出て損傷を修復している。脇枝は直角に曲って一年に三〇cmほど伸びている。若葉は大きく、長さ二一cm、幅六・五mほどになる。樹幹に損傷はほとんどなく、樹勢も盛んで雌株であるため果実をたくさん付ける。種子が発芽しないのは、寒冷すぎる環境のためと思われる。

タラヨウは、日本南部から中国南部に分布する暖地性の植物で、日本での自生地は静岡県以西にある。本樹は暖地からの植栽で、いわき市が比較的温暖な気候であるために育ったものである。

つまようじで字を書くとき黒く跡が残るため、昔、インドで経典の書写にヤシ科の多羅樹の葉を用いたことから、この和名がつけられた。本樹が植栽された背景には、仏教的要素が働いていたかもしれない。

タラヨウ(モチノキ科)

常緑広葉樹の高木で、高さ二〇～二二m、周囲一～二mになる。樹皮は灰黒色で若枝は太く緑色、雌雄異株。四、五月に前年枝の葉の付け根に集まって黄緑色の花が付く。果実は秋、赤く熟し種子は四個ある。陰樹で耐陰性が強く、やや湿地を好む。いわき市内に少数であるが植栽されている。



上平のナギ

指定 昭和五十二年五月四日

所在地 いわき市小川町上平字熊ノ前

所有者 個人

本樹は、二箭山山麓に広がる丘陵地帯の小高い丘を背にした旧熊野神社境内跡地に立つ樹木で、植栽されたものである。

成木一本のみで、樹高一三・一m、胸高幹周り一・二m、樹皮は褐色でなめらか、ところどころ鱗片状にはがれている。枝は密生して互いに交叉し、葉は平行脈で幅広い。

上平地内は北側が丘陵になっていて、急な崖地を背負って広がる自然環境になっている。本樹の立つ西と東側は崖になり、南へ突き出ているため冬の季節風がほとんど入らず、崖の間から水が湧き出て、湿度が高く暖かい。本樹の西隣に熊野神社があり、この神社を創建した上平清賢が、紀州熊野より植栽したとの伝承があり、境内はシイ・カシを主とする常緑広葉樹林になっている。

ナギは元来、暖帯から亜熱帯に自生する樹木で、日本では八丈島・紀伊半島南端・山口県・四国・九州・沖縄等、年平均気温一六℃、平均降水量一、五〇〇mm以上の地域に自生している。ちなみに小名浜は平均気温一二・六℃、平均降水量一、三九八mmである。本樹に種子ができないのは、寒冷過ぎるためと思われる。

ナギ(マキ科)

常緑の高木で一五〜二〇mになる。葉は革質で対生、形は卵形または楕円状で先がとがる。長さは四〜六cm、幅一・五cm、平行脈で中央脈はない。葉は舟底形に曲る。雌雄異株で、雄花は前年の枝の葉の付け根に数個付き、雌花は一個付く。



石森山海底火山岩塊
いもりやまかいいかざんがんかい

指 定 昭和五十二年十一月一日

所在地 いわき市平四ツ波字石森

所有者 いわき市

いまからおおよそ二千万年前の新生代・第三紀・中新世の時代は火山活動が激しく、現在の日本列島の大部分は海水面に没し、東北日本では北上山地や阿武隈山地が、それぞれ孤島になっていた時代である。

石森山海底火山の活動時期は、新第三紀層・中新世の海成層の亀ノ尾頁岩層が堆積した後に活動がはじまり、次の時代の堆積物である平層ができあがるころまで、数回の海底火山活動が行われたことが観察される。石森山頂に至る登山道はカーブが多いが、山頂に向かって右側に露出(二部セメントで被覆する岩層が、亀ノ尾頁岩層と呼ばれる深海性堆積物で、岩棲二枚貝化石が多く産出する。この地層は山頂近くまで分布しているが、石森山の火山砕屑岩のピークは、ちょうどこの岩層をつき破ったような形状で突出している。

現在の石森山頂の西縁に分布している白水層・湯長谷層群が、ほぼ同心円状にゆるく湾曲をなして分布しているのも、石森山火山活動の影響によるものと考えられている。噴出地点は、当時の海岸線よりあまり遠方でない浅海底と思われる。石森山頂や絹谷富士には、直径数一〇mにおよぶ巨大な火山岩塊が屹立しており、これを遠ざかるに従い、安山岩質凝灰角礫岩や集塊岩質砂岩が多くなる堆積環境から、噴出源地は石森山頂、絹谷富士のピークを連ねた線の付近にあったと考える。

石森山頂、絹谷富士山頂に分布するこれら巨大な火山砕屑岩が、天空にそびえ立つ姿はまことに雄大なものである。新第三紀層・中世期の日本列島の激しい火山活動の名残が、いわきの大地の中心部にあり、これは後世に残すべき貴重なものである。



おおいづまのじむ
大平熊野神社のムクロジ・サカキ群

指定 昭和五十二年十一月一日

所在地 いわき市遠野町大平字物見岡

所有者 熊野神社

南に開いた斜面の小高い丘陵の中腹に、熊野神社の森があって、拝殿前にムクロジとサカキの大本が並んでいる。両樹共に植栽されたものである。

ムクロジの樹高は約一六m、胸高幹周りは二・一六mで樹勢は盛んである。樹冠の一部が枯れているが、萌芽が盛んで脇枝が伸びている。境内にはこの樹木以外に、胸高直径一〇cm・二〇cm・二二cmの三本の若木があり、いずれも実生個体である。ムクロジの分布の中心は、中国南部・インドシナ・ミャンマー・インド等の暖帯亜熱帯で、日本での自生北限は、茨城県まで確かめられていた。福島県から北には自生地はないことから、大平熊野神社の実生ムクロジは自生の北限に近いものと思われる。

サカキの樹高は九・六m、胸高幹周りは一・三mで、樹勢は盛んである。日本での分布は福島県以西で、いわきではヒサカキをサカキと呼んでいる。サカキの葉には鋸歯がなく、枝の先端の芽が薙刀状になるのが特徴である。稚樹はない。

ムクロジ（ムクロジ科）

落葉高木で樹皮は黄褐色でなめらか、外皮は厚く剥片となつてはげ落ちる。葉は互生、奇数の羽状複葉で小葉は三枚から一二枚。雌雄同株で異花。果実は球状で黒い種子をつくる。この種子は羽根つきの追羽根の玉になる。上高久に植栽木がある。

サカキ（ツバキ科）

常緑広葉樹で高木になる。樹皮は緑紫褐色でなめらかである。花は白く初夏に咲き果実は黒く熟する。上釜戸諏訪神社境内に実生株がある。



さい
しつげん
差塩湿原

指 定 昭和六十一年三月二十八日

所在地 いわき市三和町差塩字東作

所有者 いわき市

差塩湿原は、阿武隈山地の海拔五〇〇mの高地にある低層湿原である。湿原の成立過程は、新生代第四紀更新世(洪積世)最終氷期の、寒冷期時代にさかのぼる。

周囲の山から流れこんだ土砂が谷を埋めて平原化し、停滞した川の流れが沼となり、沼の水は、深い森林を流れる間に弱酸性化すると同時に太陽の輻射熱をうばわれて低温となり、水辺の植物は枯れても腐敗分解することなく堆積促進し、泥炭層を発達させる。

泥炭層と土壌は常に過分の水を含んでいるので森林化することがなく、低温過湿に適した植物群が繁茂する好条件をつくった。

この湿原は現在、大部分は農地と宅地となり、上流部に太古の姿を残し、湿原特有の植物群を保存している。植物学上貴重な存在である。

湿原の植物はヨシ、ミツガシワ、クサレダマ、ホソバヨツムグラ、ミズドクサ、ウメバチソウ、ヤノネグサ、マアザミサギソウ、モウセンゴケ、サギスゲ、マツバスゲ、ヌマガヤ、カサスゲ、その他で、温帯夏緑林域の湿原植物である。

この中でミツガシワ、ミズドクサ、サギスゲ、ウメバチソウは更新世最終氷期の遺存植物で、差塩地区が寒冷気候の時代をすごしたことを意味する。その上、縄文海進の温暖時代に多くの氷期遺存植物が絶滅した中で、温暖環境に適応して今日の隔離分布をするに至ったのは、近年まで周囲が深い森林で覆われ絶えず冷水が供給され続けていたことの証拠でもある。特に、五月のミツガシワ開花期の景観はすばらしい。